

# 「中国と漢字伝来の時代」(1)

## 呉音と漢音の諸問題

先史古代研究会会員 矢吹壽年

### 1. 漢字の歴史的背景の概説

中国文明は、黄河文明として説明されてきた。だがしかし、最近の発掘による出土品からの考証で長江文明の方が約千年これに先行することが判明している。

小麦や粟・稗を食べ、羊の肉を食らう北部の支那人よりもコメを食う南中国の方が、より早く進んだ文化を保持していたということだ。亡くなられた一宮の黒住秀雄さんがよく言っていたことを思い出すが、一般的に「コメを食う人間は円満で、肉を食う人間は得てして力で辺りを征服しようとする。比べてコメを食う人間は暖かくて柔らかい。人とも仲良くしていける」中国語の文化が、コメの栽培を覚えた長江周辺で発生し、長江の上流、また下流へ伝わり、海岸沿いに北上して黄河に至り、黄河を遡って長安の辺りに興る黄河文明へと発展する。

ここに騎馬民族系の遊牧民族が平原の肥沃な高原を占拠し、狄（えびす）と呼ばれながら建てた小さな国家体制が、やがて青銅製の武器を用いて中国を征服する。

それ以前、夏・殷・周・漢と建国が続いた中国は、王朝が変われば哲学も文化も言葉も変わったことが明らかにされている。漢の鉄は青銅文化を駆逐する。こうして鉄は金の王座を獲る。それまで真金（金の王座）とは黄金であった。

青春・朱夏・白秋・玄冬・中央は黄中と云う。皇帝の宮廷を黄色で葺く理由である。これに金属を当てる。青金・朱金・白金・黒金である。青金は錫・赤金は銅・白金は銀・黒金は鉄であって、中央の真金は黄金であつた。

た。しかし、鉄を武器として中国を統一した時代、金の中の王はてつとなった。つまり吉備の枕言葉「真金吹く」は黄金であつた。

論語の「述而」に孔子が周の標準語で読誦したのは詩経と書経であつた。また、礼を執り行う際の礼文も標準語で読んだと出ている。中国南部に呉音が残し、日本へも伝わっているのであれば、殷・周王朝では呉音が標準語であつたと云う事が出来るのではないかと思つている。

前1050年頃（現在から約3000年以前）、中国、殷において神権政治を行い、政治的・宗教的に天意を伺う方法として、晴雨の予報まで甲骨に質問事項を記入しこれを焼いて占い、結果を漢字として残した。神意を窺うのに巫女を用いた。巫女はまた、大臣の位に登つた。（中国人が卑弥呼を同様に理解したのであろう）殷は前約1700～前約1100年の600年続いていたが、その間、祭・政を神と共に施した。

こうして中国では文字を使うようになる。用いていた言葉に字を当てていただろうから、漢字成立と音読みは当時、一緒であつた筈だ。それは、後に呉音と呼ばれる。全て神を信仰し、神を恐れ、神と共に遊び、神に問う。社会主義の現在の支那では理解できないので否定してしまう。（現在では中国古代神話の意味を解明出来ないのだ）白川静博士の漢字研究は殷の時代の民俗・習俗を示唆してくれている。

銅鐸の不思議も、銅鐸は神と共に稲作を行っていた民衆が、銅鐸を鳴らして神を呼び喜ばせ、豊作を祈つたのだ。島根県の荒神谷で考えた。大きな銅鐸は遅れるが大きな村の祭りで鳴らし、小さな銅鐸は少人数での祭祀を思わせる。神事として使用していた銅鐸を同時にもたらし、耕作を始めたと考えられ、この民衆が海を渡ってきて日本で稲を栽培した

のだ。別々に導入したとすると銅鐸の存在と数は説明できない。流水紋と呼ばれた銅鐸のデザインは神と一緒にあって、水稻を栽培した民衆が祀る神事の主役であり、神聖な祭場を表す霊雲紋と呼ぶべきであった。打ち鳴らす小さな音に民衆は神の喜びを感じ、豊作を神が宣言するのを信じたのであろう。収穫の感謝にも鳴らしたであろう。銅鐸の出土地が北九州に少なく関東以北は少ない。少しは訂正しなければならないだろうが起源はこれで良い。

日本では縄文時代に稲作が始まる。岡山理科大学の侵入路入り口に残る朝寝鼻遺跡で、発見されたプラントオパールが出土した約6500年以前となる。耕作畑は岡山市鹿田の微高地と推測する。陸稲（おかぼ）の栽培を知ったわが国では、コメの美味なこととある程度の量を得られたこと。環境にあった容易な栽培法に、雑穀と同じように考えていたのであろう。陸稲は彼らを包んでいた気象環境が全幅の信頼をおけるだけの対象ではありえなかった。

それだけ厳しい環境に生きていた彼らに次にもたらされた文化は、水稻栽培であった。紀元前2～3世紀頃と推測される。銅鐸の伝来とほぼ同時代である。

近畿以西に於いて、河川や池沼の水を用水として家族を一年間養うだけの量が得られ、糯（もち）と粳（うるち）の差があり、早稲（わせ）中稲（なかくて）晩稲（おくて）の差もやがて分かれて来る。陸稲にも比べて水耕の収穫は彼等の希望通りの収穫が得られるものであった。

そこで沸騰炊飯用の土器が流行する。（これが弥生式土器と呼ばれる。）食の変革と安定した環境が弥生時代をもたらす。一族は総員が健康で以前よりやや長寿となり、幼児の死亡率も減少したであろう。しかし動物性蛋白質を取得するために、猪や鹿を追い海洋の大型

漁業の為に壮年の男子を中心に短期間の旅行が青少年を率いて行われたであろう。縄文時代からあった狩猟旅行であったが、やはり自然の神達に祈りを捧げて行われた。豊猟（漁）と無事帰還祈り、を浮気封じは男女お互いであつたろう。若い青少年達には他部族の美少女達を見初める絶好の機会であった。これを祈る場所がそのうち定まり、神社の基となる。

新石器・旧石器の時代区分では弥生時代に青銅器も伝わって使用を始めるが、容易に手に入る材料で便利であった石器は弥生時代を通じて使用されていたから弥生時代は新石器時代の中にはいる。

中国の長江付近の青銅器に見えるデザインにも水耕稲作の環境に見える蛇やアメンボウに銅鐸のデザインとの共通性を感じる。前2世紀ごろには新しい文化の到来が見える。陝西省辺りに侵入していた後進部族で殷に供貢していた周辺部族が近隣の部族を従えて、国力を貯え、殷を滅ぼして周を建国し長安付近に都を置く。殷の遺民の抵抗、反乱の伝承が残されている所を見ると、殷の習俗とは異なった政策であつたろう。伯夷・叔斉の餓死はその一例である。

文字を知らなかったとされていた日本によりやく伝来のきっかけが訪れる。彼ら殷の遺民も朝鮮・日本へ渡来の可能性はある。少人数が幾つにも分かれて渡来したから、げんごに影響を及ぼすことは無かった。

前221～207年戦国七雄の中で最後の勝利を得て陝西省の僻地にあつた後進の秦が中国大陸を統一、秦の強法圧制を嫌った呉楚の民の一部は、新天地を求めて海流に乗り脱出する。彼らが伝えた稲作は水稻栽培であろう。

支那と呼ばれた中国はこの秦の発音に拠るとも云われる CHINA への当て字である。支は普通に読まれるが、那は呉音である。

## 2. 日本列島には呉音が前2～3世紀に 伝来

前219年秦始皇帝が、泰山で封禪の祀りをし、方士徐福は不老不死の仙薬を求めて、未婚の男女三千人、穀種、教授、技巧士等を船載して東海に出航、不帰（かえらず）と云う。

秦以前に書かれた、道教の教科書的な書物は、呉音で読むように表記してあった。焚書坑儒は漢音読みで統一する目的もあったらうか。方士の必読書、淮南子（えなんじ）も呉音表記であった。一方、漢音は、途中から中国の地域へ外域から武力的優因で侵入してきて中国人には「えびす」と見下された人たちが建国した野蛮人の国であり、方言丸出しの田舎言葉が標準語となったようなものであった。（これが漢音）三皇・五帝はいざ知らず「夏王朝」・「殷王朝」は共に黄河流域を根拠地とする黄河文明は長江の先進文化を習得して成立した。漢字の成立時の音読みは呉音と云われた長江周辺の先進文化の言葉であった。

これを受けて封建制で統治されたのが「周王朝」（前約1100～前約700）王の親族や縁族を各地に封じ、礼秩序による政治体制を確立する。封建制度で国内を統治しようとした。当然呉音を使っていたと推測する。

周は紀元前771年に西北から侵入した、犬戎（けんじゅう）に追われ現在の洛陽に遷都（前約～前256）する。これ以降を東周と呼ぶ。政治的弱体の時代で以後、春秋戦国時代と呼ぶ乱世を経てこれ以後、紀元前221年統一、始皇帝号を用いた「秦」である。

秦の富国の要因は、仟陌（せんぱく）の法＝**条里制と同じく、耕地整理と戸籍、徴税、徴兵を同時に担う**。を公布して国民に生産を負担させ、兵役を課した。貴重な塩や鉄は専売品とし、利益は戦費として蓄積され、有利な商品としての流通を制御し反乱の源を絶った。秦王は皇帝着座に際し、道教の説を用い、皇帝位の正当性を宣言する。儒家からすると脅威であっ

た。焚書坑儒の一因である。

銅鏡の銘文に道教の方士になれば国政に参画して大臣にもなる事ができると記す。それまでは、国政に関与できるのは儒家の学問の修学者のみであった。孔子もこれを目差していたのだ。

## 3. 仏教経典が文字普及の大役を果たす

仏教公伝に見えない仏教伝来の事実が、今まで中国の記録のみに期待し、また、北伝のみに固定されていた。北伝仏教は大乗仏教が唱えられ、整えられてから、ガンダーラ地方を経て、敦煌を通過して道教の一派の体裁をとりながら、インド医学や薬学、算術等の文化を伴って伝えられた。儒教を学習する学生も新来の学問として修学したから、中国全般に広まり、インド数学、特に九九は仏教と離れて広まった。南伝の小乗仏教は北伝仏教より早く伝えられている可能性を指摘したい。

中国ではもっぱら陸上の道を使用しての通商であったが、インド・ローマ・ペルシャでは隣文明との大型の帆船による航海が行われ、東南アジアのタイ・カンボジア・ミャンマーを中継基地として、中国まで交易していて、1・2世紀頃まで各地に商社を持ち、一部富豪の者は国政にも関与した。朝鮮の伽耶初代国王の王妃はインドの出生と伝えるのも、このあたりに根拠があったかもしれない。

後世、西遊記の記載に見える道教と仏教の物語は、唐僧玄奘三蔵の求経旅行の話であるが、仏教流布は翻訳僧の鳩摩羅汁の功績も大いに讃えられる。ここでお伝えしたいのは今まで紹介されなかった、南伝に関わる。西暦紀元前380年頃、インドに於いて仏教が大衆部と上座部とに分裂し、部派仏教が始まる。大乗仏教と小乗仏教と呼ぶ。小乗仏教は自利の成仏を考え教理が狭く消極的な派で、ビルマ・タイ・インドネシア・ベトナム・マレー

シアに伝わり、観音信仰などは中国南部に及んでいる。

インドのマウルヤ王朝の皇帝として全インドを統治した、アショーカ王の残した事業で、アショーカ王の宗教運動は、インド仏教史、インド思想史、インドの歴史上特筆すべき、画期的な出来事であった。(木村日記著「アショーカ王とインド思想」以文選書 26、教育出版センター、(宗教書以外の仏教歴史で南伝仏教の伝播を紹介されたのは聞かない)これによると、やがて王位についたアショーカ王は仏教を信奉し帰依した。これを灌頂と表現しているが、この仏教的善事を巖崖(巖面)法勅刻文に残し、アショーカ王の同時代の諸王国として、エジプト王、セイロン王、南方インド諸国、及びアレキサンダー領土の外国王を挙げている。中国の周末～春秋時代の乱世は認識していない。秦が六国を滅ぼして中国を統一したのは前 221 年である。

1. Anitiyoka (Anitiochus Theos of Syria Of Western aAsia B. C. 261-246)
2. Turamoya (Pyolemiy Philadelphua of Egypt B. C. 285-247)
3. Maka (Magas of Cyrene in NorthAfrica about B. C. 285-258)
4. Anitikini (Anyigonos Gonatas of Macedonia B. C. 277-239)
5. Alikasudara (Alexandar of Corinth B. C. 252-244)

これらの年代はインドの資料から計算したものではなく、全く独立の根拠によっている。これら、諸王の中で最も確実なのが第 5 の王、アレキサンダーで、西暦紀元前 252 年である。そして、巖面法勅第 13 章に記名してある諸王は、アショーカ王と同時代であり、巖面法勅第 3、第 4、並びに石柱法勅、題章によれば、アショーカ王灌頂第 12 年(仏教入信の式)を過ぎた時、巖面法勅(小巖面を除く)全部を刻した旨が記載されているから、アシ

ョーカ王が熱心な仏教となって、法大官を国の内外に派遣した(仏教の広宣流布は、仏教を信仰する信徒としての義務であり、これを行うことは、最大、無限の功德になると説かれている。王はこのように素晴らしい教えが自分の国に在り、その教えに基づいて自分の国を統治していることを諸外国に派遣して宣伝している。当然海軍を同乗させた船団によって派遣し、仏教布教の僧団、経や論文、法会の儀器や楽器等をもたらしたであろう。)のは灌頂第 13 年となる訳である。そうするとアショーカ王の灌頂 13 年が前期の五王と同時代になる。

五王の中で即位年代の最も新しいのが第 5 のアレキサンダーで、この彼王を基準に考えると、西暦紀元前 265 年がアショーカ王の即位灌頂の年となる。しかし、前見論毘婆娑という本や南伝によると、即位灌頂の式を行う前にすでに 4 ヶ年王位にあったと云うのである。摂政に付いたのは西暦前 261 年となる。

とにかく、アショーカ王の船団による広宣流布が南伝仏教としてタイ・カンボジア・ビルマ地方へ伝わったことを示唆している。当時の文明地、エジプト・ローマ・マケドニア・ペルシャが他の文明圏と、交易することで利益を得、経済的な収益と国民の前進的発展力を増しつつ自国の国益を確保していった。他地域の先進的医療や、薬剤の調達、便利な器具や美術品、貴重な鉄や宝石加工品、科学技術の交換や珍しい布帛、染色及び原材料、音楽や劇の紹介がこの時代の実際に行われていたと認識しなければならない。日本では縄文土器から弥生土器の時代である。南伝仏教は小乗仏教であった。

大乘は小乗の上級に位置する教えであると、仏教哲学では捉えられている。南伝の小乗仏教は確かに日本に及んでおり、民間信仰と一緒にあって、北伝仏教が伝来して以降、修験道として、仏教・神道と習合して日本的独自

の東洋神仙宗教として発展する。南伝仏教が日本にもたらしたものは、龍信仰、観音信仰、地蔵信仰、阿弥陀信仰、弥勒信仰などである。小乗はいつでも大乘に入信しても良く勿論小乗に固執してもかまは無い。台状への入り口と理解して良い。

#### 4. 漢字伝来前後の年譜 (1)

西暦 57 年とされる弥生時代の倭奴国 (わのなこく) から、漢の光武帝に貢ぎするときに提出されたと推定される国書がある。中国の王に対する表敬文である。(我が国が漢字を使用した記録の最初である。中国や朝鮮からの帰来人の筆記であったかもしれない)

西暦 107 年、倭の国王帥升 (すいしょう) 等が後漢に生口 160 人を贈り謁見を求める。日本では弥生時代末のことである。



188 年頃後漢の桓帝 (かんてい)・靈帝の間 (47～188) 光和年中 (178～183) 倭国が乱れて攻伐が続き、ついに卑弥呼 (呉音読み=ひみこ・漢音読み=ひびこ) を共立して女王とする。

238 年この年 (南朝呉の朱鳥元年) の銘のある鏡が、甲斐国西八代郡の古墳から出土する。中国に記録されたかどうかは別としても、これらと同様の交際の存在を思わせる。呉の周辺が水耕稲作文化の古郷とするのは偶然ではないと納得する。

238 年帯方郡主、公孫淵、魏に誅されて中国に朝貢の道が開く。以前から倭は中国に朝貢も帯方郡で搾取されていたようだ。

239 年卑弥呼、使人難升米 (なんしょうまい・漢読み=だんしょうべい、またはだんしょうめ) らを魏に派遣、男生口四人女生口六人その他を献上、12 月魏王、卑弥呼を親魏倭王となし、金印・紫綬をあたえ銅鏡百枚などの好物を下賜される。

240 年この年、帯方太守弓遵 (きゅうじゅん)、魏の詔書、印綬、賜物、を倭国へ送付する。卑弥呼の家来に魏王の詔書・印綬を下賜、これは属国と看做されている。

243 年卑弥呼、魏王に使者を派遣し、生口その他を贈り使者掖耶狗 (えきじゃく・漢読みえきやこう) は率善中郎将 (中国の官職名) の印綬をもらう。陪臣として魏王の家臣扱いであるが、考えを変えてみると、下記の理由もあると指摘できる。

245 年この年、魏の齊王、邪馬台国の使者難升米に黄幢 (こうどう・指揮者が揮 (ふる) う旗、他国の使人に与えるものでない物、或は朝鮮派兵許可か、魏の軍事指揮権を担う) を与える。これは、中国の法に準えて、死後葬祭は中国の法の通りの造墓規模を承認している事になると思われる。(前方後円墳を含めて大規模古墳建造の根拠ではないか)

この続きは 4. 漢字伝来の前後の年譜 (2) として掲載します。“きび考” 12 号の掲載内容

- 4. 漢字伝来の前後の年譜 (2)
- 5. 呉音から漢音へ
- 6. 漢字発音の歴史の概説
- 7. 考古学者の苦惱 漢音読み

益々佳境入ります。お楽しみに